

第十一章 『縁』、方法としての〈観照〉

——書き直される「蒲団」、作り直される〈家〉——

対象を主観を交えずに冷静に見つめることを意味する〈観照〉という語が、自然主義文学の描写態度を言い表す術語として注目を浴びるのは、島村抱月の「芸術と実生活の界に横たはる一線」(一九〇八「明治四一」年九月、「早稲田文学」)、「観照即人生の為也」(翌年五月、「早稲田文学」)などに端を発する、一般的に自然主義の退潮期と評されるころのことである。いわゆる「実行と芸術」をめぐる対立軸から浮上した「無関心、没利害の思想」(「芸術と実生活の界に横たはる一線」)による〈観照〉という方法については、同時代にもさまざまな議論が交わされたが、それらは概して観念的な自然主義論のレベルにとどまり、具体的な作品をめぐる議論が深まることはなかったといつてよい。

本章では、田山花袋の『縁』(一九一〇「明治四二」年三月―八月、「毎日電報」)を扱うが、それは、このテキストが〈観照〉を重要な鍵概念としているからにほかならない。この分析を通して、〈観照〉がいかにしてテキストに具現するのかを明らかにし、さらに、そのことによつて照射される同時代的な課題の所在を整理してみたい。先走つて言っておけば、そこから浮かび上がってくるものは、文字通り明鏡止水の心境でものごとの真相を見極めようとする観察者の態度、などではけつてない。むしろ、見るべきもの・見えるべきもののさえも見えなくしてしまうような転倒した〈見ること〉の機構こそが、その本質として現出してくるはずである。

一 セツパ詰った小説

よく知られているように、夏目漱石は『鶏頭』(一九〇八「明治四一」年一月、春陽堂)の「序」において、小説を「余裕のある小説」と「余裕のない小説」とに二分することを提唱した。

所謂二種の小説とは、余裕のある小説と、余裕のない小説である、(中略) 余裕のある小説と云ふのは、名の示す如く逼らない小説である「非常」と云ふ字を避けた小説である。不断着の小説である。此間中流行つた言葉を拝借すると、ある人の所謂触れるとか触れぬとか云ふうちで、触れない小説である。(中略) ある人々は触れなければ小説にならないと考へて居る。だから余はとくに触れない小説と云ふ一種の範囲を拵らへて、触れない小説も亦、触れた小説と同じく存在の権利があるのみならず、同等の成功を収め得るものだと言張するのである。

「触れる小説」「セツパ詰った小説」「息の塞る様な小説」といった批難の対象が、この直前に発表された「蒲団」(一九〇七「明治四〇」年九月、「新小説」)とそれに伴う一連の騒ぎに向けられていることは明らかであるが、そんな自然主義的な「セツパ詰った」態度を漱石が「眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくなる」と説明していることにあらためて注目したい。

漱石の物差しを用いていえば、「蒲団」は確かに「セツパ詰った小説」であつた。というのも、この小説のひとつの主題は「眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくな」った主人公を、三人称の語りの枠組みの中で造形することにほかならなかつたからだ(第六章参照)。このテキストの語り手は要所要所で、「少くとも男はさう信じて居た」、「けれど二人は果して左様親密であつたか、何うか」といった介入を挿むことで、主人公の

視野の限定性を暗示し、そこに意味を発生させようとしていた。

この、限定された主人公のまなざしに内的焦点化しながら物語世界を構造化する方法は『田舎教師』（一九〇九）『明治四二』年一〇月、左久良書房、殊にその前半部に顕著な形でみられることになった（第九章参照）。これらのテクストは、主人公の局所的なまなざしによる対象世界の分節を素材として、用いつつ物語世界を構造化してゆく。その言表の多くは、たとえば「四里の道は長かつた」という一文がそうであるように、主語を明示せず、いわゆる述語的統合のうちに、対象世界とそれをまなざす主体のかかわりを表す。そして、その分節Ⅱ言分けに応じて、主人公自身もまた、物語世界に身分けされてゆくことになるのだった。

さてここさらに、吉本隆明の見取り図を借りるならば、「セツパ詰った小説」の達成点は、「蒲団」と『田舎教師』の間に書かれた「一兵卒」（一九〇八）『明治四二』年一月、「早稲田文学」に求めることができそうである。

蟻だ、蟻だ、本当に蟻だ。まだ彼処に居やがる。汽車もあゝなつてはお了ひだ。ふと汽車——豊橋を發つて来た時の汽車が眼の前を通り過ぎる。停車場は国旗で埋められて居る。萬才の声が長く長く続く。と勿然最愛の妻の顔が目に見え。それは門出の時の泣顔ではなく、何うした場合であつたか忘れたが心から可愛いと思つた時の美しい笑ひ顔だ。母親がお前もうお起きよ、学校が遅くなるよと揺起す。かれの頭はいつか子供の時代に飛返つて居る。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてか／＼と光らせながら、子供の一群に向つて怒鳴つて居る。其子供の群の中にかれも居た。

脚氣衝心で倒れそうになった「セツパ詰った」主人公の頭に、歩きながら浮かんできたぎれの妄想を記した言述である。これは、写生文的な発見・気付きの連鎖からなる文体が、三人称小説の作中人物の妄想に適用されると、そのまま内的独白（意識の流れ）の文体になることを示す好例である（これは「蒲団」に頻出する文体でもある）⁴が、それはさて置き、くだんの吉本の評価とは次のようであつた。「一兵卒」が野戦病院をでて原隊へ復帰してゆく途中でたおれて死んでゆく過程を、「一兵卒」の内的な独白としてえがき、景物の描写も内的、な眼からきりとするという視角を設定したこの作品は、自然主義の方法がはじめてどれだけの言語空間を占めうるかを極限まで定着した点でおおきな意味をもつものであつた。作家主体は仮構の一兵卒を設定し、ここに自己移入しながら兵卒の内的な独白と景物と作家の主体的な描写とをひとつの〈意味〉の流れとして結びつけるという方法によってつらねられている。また、大杉重男は、「一兵卒」を夏目漱石の『坑夫』（一九〇八）『明治四二』年一―四月、「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」と比較しながら、「漱石の語りが一見「意識の流れ」的に見えて、実際は事後的な回想であるのに対して、花袋の語りは無時間的かつ超越的位相にあつて、そこから主人公の内面に最も近い場所に現前する。そこでは語る時間と語られる時間が一元化され、語り手は主人公を相対化する視点を持ってない」とする。

「眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくな」つてしまつた主人公の「視角」を利用する方法は、同時期の「ネギ一束」（一九〇七）『明治四〇』年六月、「中央公論」や「土手の家」（一九〇八）『明治四二』年一月、「中央公論」、「不安」（同七月、「文章世界」）などにも見られ、これらが写生文（いわゆる余裕派）批判や前期自然主義批判から導き出された、花袋なりの到達点の一つだったことが確認される。とするならば、「人間の世界なり人生なりは、実際には万人が万人として知つて居る世界や人生ではなくて、彼等がてんでに自分一個の主観に映じて持つて居るものである」と主張する岩野泡鳴の描写論と花袋の方法との間には、その決定的な差異を見出すことができないことになるだろう。泡鳴の「蒲団」評価はあまり言及されることはないが、一例を挙げると、「鋭

敏な神経の微動によつて、肉霊不二の心理境を実現するまゝに、抽象的な解決を持たない刹那的文芸の傾向^[7]がある、というものだった。「刹那的」という語が泡鳴にとつて格別のものであることを勘案するならば、この両者は、「余裕のある小説」が志向するような共感可能な均質空間を否定的媒介として、まさに同じ方向を向いていたと判断すべきだろう^[8]。

ところが、佐藤泉が指摘するように、「描写論」（一九一一年四月、「早稲田文学」）における花袋には、たとえば「雨戸を閉める音が聞えた」という文において、「聞えた」という述語部分が「暗黙のうちに聞く身体に関する情報を含んでしまう」ことを問題視しようとする様子が見当たらない。一方の泡鳴はといえば、「見る主体を不可欠の構成要素とするような空間」を前提にしている、この点において、泡鳴と「描写論」の花袋とは決定的に異なるのであった。佐藤はここに両描写論の間の「断層」を見てとるわけであるが、本章の関心事はむしろ、泡鳴的な認識から遠ざかっていった花袋個人の方法的な変節とその過程、および着地点としての「観照」のほうにある。ここでは、「蒲団」、「二兵卒」のあとに執筆された『生』（一九〇八年「明治四二年四月〜七月」、「読売新聞」）、『妻』（同一年一月〜翌二月、「日本」）、『縁』のいわゆる三部作のうち、「蒲団」をプレテクストとする『縁』に焦点を当て、その変節の内実を考察したい。

二 排除される者たち

「蒲団」発表後の田山花袋が、モデルとなった岡田美知代について語ることの困難にぶつかった、その苦衷を推測することはさほど難しくない。しかし、だとしたら、『妻』や『縁』において、その「蒲団」をあからさまにちらつかせながら、花袋がふたたび女弟子との間のできごとを題材にしたことをどう理解したらよいのだろうか。もちろん、ここで、晩年の母親を主人公に据えた『生』を書く動機の一つといわれる「皮剥の苦痛」なる主張を持ち出すことで、一応の答えが得られるであろうことは承知している。ただし、すでに文壇を挙げてのスキヤンダルになり、しかも当事者たちからの異議^[1]も申し立てられていた一件について、それをふたたび語り出すまでには相当の自己検閲が働いたはずである。ということは、花袋には、その抑制をあえて撥ね除けてまでこの問題をふたたび物語るこの意味があったと捉えるべきだろう。

『妻』『縁』で物語られているのは、「蒲団」の顛末の前後の文脈である。そしてそれは従来、主として読者の作家論的な関心を満たすために用いられてきたわけであるが、忘れてはならないのは、それらが決して物語内容の時系列順（『妻』↓「蒲団」↓『縁』）に語られていないという点である。『妻』も『縁』も、明らかに読者の中の「蒲団」の記憶を喚起しつつ、なおかつそれを、もとあったものとは異なるコンテキストの中に象嵌しようとする欲望のもとに統辞されている。であるからそれは、不足していた情報の事後的な補填なのではなく、先行する「蒲団」を、もとあったコンテクストとは異なる場所に定位するための物語叙述という性格が色濃いものだといわなくてはならない。そして、「蒲団」が〈作者〉イメージの生成と流通に決定的な力を持っていたとすれば、それを歴史化しようとする物語叙述は、〈作者〉の再編成を志向するものであったものとみて間違いない。では、その歴史Ⅱ物語叙述の実態とはいったいどんなものだったのか。

結秀実^[12]は、花袋は「蒲団」という「非―真理」を排除・隠蔽するために『生』以下の「自然」主義作品を書いたのだ、と指摘しているが、まずこの見取図の妥当性は揺るがないだろう。本章が試みるのは、あまりに論じられることの少ない『縁』という歴史Ⅱ物語叙述^{フィクション}の具体的な様相と、その背景となる同時代コンテクストの再検討である。

さて、『縁』の冒頭、主人公・服部清は、田舎寺に隠居する旧友・山崎雍之助を訪問して「もう我々には、青年といふ心持が全くなくなったねえ」と語る。なお、雍之助のモデルは明治三二年に羽生・建福寺の住職と

なった太田玉茗で、作中では、かつて清らと一緒に東京で詩集を出した^{〔13〕}ことのある文学仲間とされる。「蒲団」や『生』がそうであったように、このテキストでも新旧世代間の葛藤が主たるテーマである。ただ、新世代の理解者を自負する竹中時雄の無自覚な〈旧さ〉が梃子となってプロットを前進させるような力学が働いていた「蒲団」に対し、『縁』の服部清の立ち位置は、「もう、我々は青年ではない」「もう我々の後に青年の群がある」といった諦観めいた述懐にも見て取れるように、新しい時代への推移が完了しつつあることを傍観的に眺め得る場所に落ち着いているように見える。

ところで、「蒲団」のリライティングという観点に立つてみたとき、この〈田舎寺〉という場が重要な意味を持つことが分かる。

十三年の歳月は短くはなかった。さまざまの世態や事件が其前に展けた。明治の思想もいろいろな変遷を見せて社会主義が起つたり、日露戦争があつたり、自然主義が其萌芽を出し始めたりした。友達の群にも栄達したものもあれば、零落したものもある。しかしかくれた人に取つては、そんなことは何うでもないやうに見えた。(中略)

清はこのさびしい寺の境内を歩きながら、いつも都の活動を思った。活動の巴渦の中に居ては解らない活動の状態が此处では分明と眼に浮んで来るやうに思はれる。(二)

いわば、「蒲団」的な「セツパ詰つた」言表の現場を、時間的にも空間的にも相対化するメタ・レヴェルの陳述が機能する場所、それがこの〈田舎寺〉というトポスであることをまず確認しておこう。清がここを訪れるのは、「都の活動」の「巴渦」に溺れずに、そこから超然とした暮らしを営む旧友と自己を重ね合わせるためである。この意味で、前年十二月に刊行された『田舎教師』における成願寺の山形古城とよく似た機能^{〔14〕}が、この寺と住職に仮託されているといえよう。ただし、『田舎教師』の主人公は、田舎に居住することで自己の同一性を獲得したが、『縁』の主人公は、このあと見ていくように、東京と田舎との間を往復することで自己を保持しようとするだろう。

さらにここで確認しておきたいのは、この田舎寺の山崎雍之助という人物をキー・パーソンとして浮上させることによって、ひとつの重要な「蒲団」との差異が明示されていることである。それは、服部清の妻が雍之助の妹であるという事実である。清と雍之助の間柄について、語り手は次のように語る。

二人は若い頃からびつたりと心を合せて来た。互ひの境遇の相違から、考へも心の持方も大分違つて居たが、その親しい間柄はつひぞ今まで破れたためしがなかった。都から来た男は寺にかくれた方の男の妹を妻にして居た。(一)

「蒲団」において、新派の女性・横山芳子に対置されていた旧弊で無個性な細君は、こうして新たな属性をまとって再登場することになった。彼女は清の妻であると同時に、いやそれ以上に、清と兄Ⅱ雍之助との友情を保証する象徴としての機能を担っている(彼女は、自分が望んだのではなく、清の雍之助へのたつての懇願によって嫁いできたのだ^{〔15〕})。そして、ここに露見しているのは、のちに詳述するように、『縁』の世界を根底から支えるホモソーシャルな連帯の構図であり、この点において、『縁』は「蒲団」とは根本的に異質なテキストとしての相貌を見せる。そして、このような文脈は『縁』のプレテキストである『妻』において用意されていたものでもあった。

『本当にさうだ。夫妻の関係もさういふ風だねえ』と田邊は言つて眉を昂げて、『だから一步突込んで考へて見ると、夫婦の淡い愛情は動物の愛情に近い。心よりも肉で堅く結び附けられてある。殊に、女がさうだねえ。男の方ではいくら肉が中心になりかけて来ても、まだ心が動く、頭が動く。動物だけでは、何うしても生きて居られない。けれど女は平気だ。動物結構で御座いッて言つて、のんきに生きてる。児に対する愛情などを観察して見てもすぐ分るねえ君。先生方の愛情は盲目的だからねえ。飽まで肉体的だからねえ。』

『そこが性^{せい}の違ひだ!』

と勤は心から感じたやうに言つた。

『男は種を蒔く、女はそれを育てる。要するに平凡なる真理さ。人間あつてから常に繰返された事実に過ぎないさ。右に推して見たつて左に推して見たつて、この事実が何うなるもんぢやない。これを思ふに、僕は厭世ならざるを得んね』

と田邊は例の思想を持出した。勤もそれからそれへと熱心に語つた。(三十三)

男性同士の連帯から「妻」という存在が排除されることの必然性。それは男たちが妻を「動物」的と罵り、また首肯きあうことによつて確認される。そして、「妻」が劣位に置かれることの論理は、このテキスト全体を通して、女性たち自身の感慨に耽る発話や心中思惟などによつて周到に追認される仕組みになっている。¹⁶

排除されるのは「妻」ばかりではない。清の家にふたび敏子（蒲団）の横山芳子¹⁷が訪れたのちも、そのことによつて、かつてのような新旧世代の女性間に葛藤が生じることはほとんどない。なぜなら、敏子もまた「盲目」的な「動物」の例に漏れないのであり、その意味において、両者はほぼ等価だからである。

「蒲団」は、ハウプトマン『寂しき人々』などの外国文学に誘引された三角形的欲望の対象としての「新しい恋」（そしてその象徴としての横山芳子）についての物語であつた。時雄の欲望は、あくまで記号化された芳子に向けられていたが、当然のなりゆきとして、それは、実体としての芳子にぴたりと重なり合うことはない。そして、その記号化された芳子と実体の芳子との間隙に生じた空所に、時雄の妄想と煩悶が充填されたのだつた。読者が多く眼にしたのは、この妄想と煩悶である。このとき芳子は、時雄にとって了解不能な存在としてあり、その意味で、時雄と芳子の間には、一応の対称性が見てとることができた。藤森清が指摘した、芳子の「誘惑としての戦略性」とは、そうした彼女の側面を浮き彫りにしたものにほかならない。¹⁸

いっぽう、『縁』の敏子もまた了解困難な存在として描かれているが、だからといって、その不可視の闇の領域が清を脅かすことはもはやない。他者性を剥奪された彼女は、「蒲団」の芳子が有していたはずの「変化の可能性」（女子^{をんな}ももう自覚せんければいかん）、「日本の新しい婦人としては、自から考へて自から行ふやうにしなければいかん」までも摘み取られてしまつていて、所与の役割や立場から逸脱することを許されないのである。

三 女性の贈与

一九〇九「明治四二」年二月三日、「東京朝日新聞」に次のような記事が載つた。

●「蒲団」の後篇

▽田山花袋氏の失恋?

早田^マ田山花袋氏を卒業して目下『サンデー』と云ふ雑誌の記者をしてゐる永代静雄君は女流作家の岡田美

知代女史と結婚することに成り、田山花袋君が女史の養父となつて興入をさすと云ふ事だ。一寸宮相對小林孝子対土方伯の關係によく似てゐるので内情を探つて見ると慙^かうだ。永代君も岡田女史も神戸に居た時代から教会か何かで心易くなつて互に愛しつ愛されつしてゐたが、其後永代君は上京して早稲田に入る事に成つたので、岡田女史も上京して田山花袋君の門に入り、盛んに肉欲は人生の最大問題であるといふ研究を遣つてゐたが、何時しか田山君は女史にラヴをしたと見え、有名な自然派の小説『蒲団』に成つて現れたので流石の岡田女史は赤面をする、永代君は腹を立てる、大煩悶大愁嘆であつたが、二人の恋は何うしても諦められぬと見え、愈^{いよいよ}結婚するといふ段に成つたが女史の両親が承知をせぬので師匠たり恋人たる田山君を訪うて女史が結婚一件の相談をするとそれは気の毒なことだと云つて粹を利かして女史を養女とし改めて田山家から永代家へ嫁入らすことにした。(原文句読点なし)

岡田美知代と永代静雄との結婚を知らせる記事である。これを見た太田玉茗は花袋宛の書簡の冒頭でこのことについて次のように尋ねている。「岡田女史永代と結婚御済候由『朝日』にて見申候事実に御座候や」^{「19」}。

太田玉茗がこの二人のことを気にしていたであろうことは容易に想像がつく。すでに『蒲団』のスキヤンダルによつて少なからず動揺していたはずの花袋周辺の人々にとつて、この二人の「惑溺」の行方は他人ごとではなかつたはずだからだ。まして、花袋の妻・りさは玉茗の実妹であり、岡田美知代の動向は身内の問題にほかならない。ところが、『縁』には、この玉茗の問い質しに相当するような山崎雍之助の動揺はあまり見当たらない。もちろん、雍之助が清に対して不同調の意を伝え、再考を促す場面は幾度かある。ただし、『縁』には、清がふたたび敏子を迎え入れることになつたことなどを、意外にもあつさり追認・同調してくれる雍之助の物分かりのよきこそが書き綴られている。なにせ、この二人は「若い頃からびつたりと心を合せて来た」間柄なのだ。よつて、先の書簡に見たような花袋への疑念や不信感ほとんど糊塗されてしまつてゐる、といつてよい。

同時代評には『縁』を「野暮」な男が女への未練を繰り返しているに過ぎないとする論調が見られる。つまりこの評者は、『縁』は「蒲団」と同じであると断じてゐるわけだが、他にも、『ふる郷』(一八九九「明治三二」年九月、新声社)や『野の花』(一九〇一「明治三四」年六月、新声社)を連想したという相馬御風の評もあり、これらは要するに、『縁』が、明治三十年代の作品から、その過剰な思い込みと感傷性の面ではほとんど変化していないことを批判しているわけだ。実際のところ、テキストには主人公の敏子への執着が未練がましく連ねられてはゐる。しかし、『縁』が「蒲団」と決定的に異なつてゐるのは、女弟子の登場に端を発する混沌への志向性(混沌が包含する再生への可能性)ともいふべきものがすつかり後退し、その代わりに、かつてあつた秩序を回復させるための方法としてのホモソーシャルな関係性が強調されているということである。以下、この問題について考察していこう。

周知のように、イヴ・K・セジウィックは、ルネ・ジラルルやレヴィストロースを援用しながら、女性を象徴的な財として交換するホモソーシャルなイデオロギーの力学を浮き彫りにした。女性の交換こそが、男性中心の制度を支えるシステムであり、このとき、財として交換される女性は、父権制度内に回収され、同時に周縁に排除されるのだつた。

さて、岡田美知代と永代静雄の結婚の話題に戻ろう。そもそも、この引き剥がされたはずの二人がふたたび結びつくことになつた背景には、花袋の働きかけが必要不可欠であつた(以下、情報¹²の混乱を避けるために、『縁』の物語内容を素材に、ここに至る過程を整理する)。敏子のたび重なる再上京の意志を汲んで、清が敏子の両親を骨折^{たよ}つて説得したのは、「僕にはかの女を幸福にしてやる責任がある」という自覚¹³からだつた。清は「僕を使つ

て来た女、僕に一生の運命を託さうとした女、その女を単に芸術の犠牲にして、それで好いとすましてゐることは出来ない。僕は責任を感じて居る」(三三) というように、「蒲団」の一件を準抛梓として仄めかしながら自己の「責任」を強調する。ただし、上京後まもなく敏子は馬橋(蒲団)の田中と駆け落ちしてしまい、さらに悪いことに彼女の妊娠までも発覚し、敏子の両親から寄せられていた「師」としての信頼は瓦解する。もちろんここで、清は、自分をふたたび裏切った敏子との関係を潔く清算することもできたはずである。しかし、彼は敏子との関係を断ち切ることがどうしてもできない。というのも、この事件で彼が味わったのは、騙されたことへの憤慨とともに、敏子との関係から疎外されてしまった淋しさだったからだ。結局、清は敏子との関係を維持することを選択する(まさに三角形的欲望の構図である)、と同時に彼はここで、敏子らの出奔による失地回復のためのカードも切る。すなわち、敏子を養女として貰い受けるという提案がそれである。

細かい心理状態は絶えず続いた。何処かに身を隠して居る敏子と、牛込の山の手の下宿に居る馬橋と、毎日社へ出かけて行く清と、この三人の心が、其時々によつて燃えたり消えたりするのが分明と解るやうにすら思はれた。『兎に角、自分はこの巴渦の中から脱するのは厭だ。このまゝ、放つて了ふやうな淡い心にはなれない。少くとも復讐^{ふくしゅう}をしてやらなければならない。兎に角、籍を入れやう、さうして置いて、その成行を見やう』清はこんなことを思つて、独りで激昂することもあつた。

『ラバーがドウター、イン、ロウになるのなどは面白い自然のアイロニーだ。ざまを見ろ!』(二十九)

敏子を「ドウター、イン、ロウ」に。要するに、負の財産を貰い受けるという逆説的な贈与ではあるが、この清の提案に、敏子の父親と兄の心が動いたのは当然であつた。田舎の名士である父親は、「かうした娘が其家から出たのを恥ぢ」ていたからである。父親からは次のような手紙が届いていた。

『本人の不始末より生涯の目的を誤りたること故残念ながら今は唯行末までの勘当を致し候より他に、処置すべき道も無之候、上京の節、如何にしても馬橋に呉れぬといふことならば、自己に呉れよとの貴台のお話し有之候、其時、貴台にならば差上げてよしと申候、今は唯一刻も早く貴台に送籍仕つり候他に致し方これなく候、さりとて表面戸籍を送り、陰に馬橋に配偶せしむるならば、九死の下瞋する能はず候』(二十五)

敏子の送籍は双方の利害にとつて好ましい着地点であつた。この「女性の贈与」によつて、父親は代々保ってきた家の名譽を守り、清は父親が抱えていた悩みの種を引き受けることで威信を回復し、同時に、ほぼ失いかけていた敏子を「合法的」に手に入れることができたのである。ちなみに、敏子を籍に入れることについて、服部家の親戚はおしなべて不服であつたが、しかし「清はそれを別に意にしなかつた」(三十二)。父が西南戦争で戦死、母も兄もすでに亡くなつていた服部家では、清こそが家長だったからである。

四 新しき家

さて、敏子を合法的に手に入れ「娘」^{ドウター}とした清が次に仕掛けたことは、手に入れたばかりの「娘」を馬橋に譲ることだった。先の引用にもあつたように、敏子の実家は馬橋との結婚については断固反対の態度を崩さなかつた。しかし、禁じられていたからこそ、この「女性の贈与」は価値があるのだ。

一緒にするなら終生の恨、かう敏子の父は書いて寄した。清の身にしても、結婚をさせるのは余り好い心^{よこ}

持ではなかった。それに、馬橋の性格にもまたよく飲込めないやうなところがある。(中略) しかし清はそれを顔には現はさなかった。『本当に、一つしつかり遣つてくれたまへ。過失は過失で、過去は問はないことにして、これから大に真面目にやつて貰はなくつては……』かう言つて清は若い人達の方を見た。(三十七)

何気ない表情を装いながら敏子を馬橋に譲つたのは、清に何らかの打算があつたからである。これに対して馬橋は、「遣れる丈は遣つて見る積です」と「笑ひながら」答える。そして、これをきつかけに、馬橋の清に対する反抗的態度や疑念は一気に氷解したかのように見える。清は人生と文壇の先輩として馬橋にアドバイスを与え、馬橋はそれに素直に耳を傾ける。いっぽう、それとともに敏子はどんどんテクストの周縁に迫り遣られ、生気を失っていく。

『先生などでも矢張ライフが辛いことがありますか』

ある日、馬橋はかう清に言つた。

『それはあるともねえ……』

『何うも私などには刺戟が多過ぎて困るんです……』清の方を見て、『今少しかう落附いて居たい、暢氣にして居たいと思ひますが、何うもそれが出来ない』

『しかし、さういふ処は誰でも通つて来るんだから』

『何うもいけません。今少し動揺しないやうになると好いですけど』かう言つて、『先生なども矢張さうでしたかしら』

『それはさうとも……、或は君などよりもつと烈しかったかも知れない。今と違つて、時代がもつと非常に圧制的だったからねえ』

『それはさうでしたらうな……』(四十二)

ここで提示されているのは、新しい家父長のもとで編成されつつあるエディプス的な「家族」の構図である。かつて、「蒲団」の竹中時雄は、田中のように墮落したい(芳子と関係を持ちたいⅡ田中に同一化したい)という欲望を隠すことに苦勞したが、『縁』では両者の立場は反転している。服部清は敏子を譲り渡すことによつて馬橋を馴致し、お互いの権力関係を確認し、他方、その抑圧に適応しつつある馬橋は「父」である清に同一化しようという欲望を隠すことをしない。のちに馬橋は、この「家」を飛び出ることになるが、それは清が着々と地歩を固めつつある抑圧の構造への反発にほかならなかつた。「馬橋は敏子が全く『清の敏子』になるのを見て居るに忍びなかつた。中年に対する青年の反抗といふこともかなり力強く交つて居た。其処に解くべからざる暗闘黙闘があつた」(五十六)。

ところで、花袋は、岡田美知代を一九〇九「明治四十二年一月一四日に正式に田山家の籍に入れ、二人を結婚させている。そのときの通知は以下のようなものだった。

肅啓益々御清祥奉欣賀候 陳者今般

永代 静雄

田山みちよ

の兩人結婚致し東京市牛込区原町三丁目十一番地に居を定め候間此段御披露旁御通知申上候

明治四十二年一月 石島郁太郎

一八九八「明治三二」年に施行された明治民法^[24]下では、当事者本人双方と証人二人の署名した書類を戸籍吏に届け出ることによって、正式に婚姻の成立が認められた。右の通知は、この制度に則って二人の結婚が執り行われたことを示しているが、ひとつ引掛かるのは、男が三十歳未満、女は二十五歳未満の婚姻の場合、父母と戸主の同意が必要であったという点である（永代はこのとき満二十二歳、美知代は二十三歳）。小林一郎によれば、岡田家の戸籍にはこの結婚の事実は認められないという。ということは、この二人の結婚の実態はいわゆる足入れ婚（内縁婚）であった可能性が強い。のちの第一回国勢調査（一九二〇「大正九」年）のときでさえ、「届け出していない配偶者がいる」と答えた者が、全体の一七パーセントいたというから、この手の結婚は珍しくなかったといえるが、少なくとも表向きは正式の結婚の手續きをとった岡田美知代と永代静雄に対して、『縁』の敏子と馬橋が（おそらく民法を楯に）いつまでも結婚の手續きをとることが出来ない設定になっていることについては注意しておく必要がある。

清は言葉を改めて、馬橋に言った。

『それで、何うしました。結婚の届は？』

『まだ、国から何とも言つて来ません。面倒なものですから、投つて置くと見えるんです』

『困るねえ！』

馬橋の籍はある田舎の寺の戸籍に入つて居た。幼い頃父を亡つたかれは、其寺で成長^{おほき}くなるやうな不仕合な運命を有つて居た。母親は再縁して大阪に居た。僧籍から離れなければ、公の結婚^{おほき}届は出せなかつた。

『早く、誰れかに頼んで、届が出せるやうにして貰はないと好かんねえ。放つて置くと、役場の方は好いとしても、子供が学齢になつても、学校に上がれないやうなことになるからねえ』（三十七）

ここで直接話題にあがつているのは、馬橋方の親の事情であるが、この挿話は、どちらか一方の親の同意が得られないと馬橋と敏子が結婚できないことを再確認させるものであるともいえる。つまり、ここで清は、自分の同意なしの結婚がありえないということを遠回しに言い聞かせつつ、同時に恩を売りつけているのである。敏子を譲つてもよいが、そちらの都合でそれができないでいる、早く何とかしてもらわないとこちらとしても困る、というのが清の論理だ。そして、現に馬橋家からの同意が得られていない以上、彼らの同棲生活は、法が認めたものではなく、あくまで清が私的に認知したものにすぎない。かくして『縁』は（あるいは、服部清は、「家」という制度の持つ抑圧的な構造を最大限に利用しながら「若い人達」を去勢していくのである。

五 家の完成

このように『縁』は、「公けの結婚届」不在のまま進展するところにポイントがある。ただし、この曖昧な状態は、馬橋の側から見れば、清による支配からの逃げ口として機能することにもなるだろう。敏子との生活が行き詰まった頃になってようやく、馬橋のもとに故郷から戸籍についての話がまとまりかかつて届くが、しばしの逡巡^{もどろもどろ}の果てに、彼は結婚届の提出をしないことを決心する。このとき彼の心には「自分等二人の事件に傍から好奇^{ものずき}に入つて来た清夫妻の心持が異様にも不思議にも思われて来た」（四十四）という。清の存在が重苦しい壁となつて自らを抑制していることに、馬橋は意識的にか無意識的にか拒否の態度をとつたのである。それ以前の二人の関係はどうだったかというと、敏子との同居生活が無秩序な状態に陥りかけた当初、馬橋

は清に縋る気持ちで「一度入らして下さい」と、仲介役になってくれることを幾度も頼みこんでいる。しかし、「清は行く気にはなれなかった。放つて置く方が好いと思った」(四十四)。のちには、敏子が繰り返し清の来訪を切望した。「先生は御覧にならないから、よくお解りにならないでせうけれど、此頃はそれは酷いんですよ。家だの、子供などは丸で構ひつけないのですから」(同)。

馬橋と敏子の懇願は、実質的にこの「結婚」を支配・監督している清に対する申し出としては妥当なものであったといえるだろう。いっぽうの清は、本人たちの自主性の尊重を理由に訪問を拒絶し続け、決して自分の目で若い二人の生活の醜態を確認しようとはしない。しかし、そもそも彼らの結婚に最初から自主性などはなく、拒絶の根拠としては脆弱であるといわざるを得ない。またそればかりか、清は次のような無根拠な「男の心持」なるものを持ち出して、敏子を排除しようとする。

『面白いから、馬橋君はわざとさうするんでせう?』

『けれど——』と敏子は激して、『わざとそんなことをするつていふ法があるでせうか、一家の主人じやありませんか』

清は笑ひながら、

『それはさうだけれど、さう一概にばかりも言はれないよ。矢張、男の心持ツて言ふやうなものがあるからね……』間を置いて、『僕には馬橋がさうする心持がよく解るね』(四十四)

敏子を譲り渡したときから、清は明らかに馬橋との紐帯のほうを大事にしているように見える。かくして二人の「結婚」生活の破綻は、もしそれが正式の結婚ならば親の同意が必要(二十五歳以下の場合) など、その必要もなく、敏子側からの一方的な通告で訪れることになる。以下の引用は、敏子が清に送ってきた手紙の冒頭部分である。

愈・馬橋と離別したいと存じます。その訳は、とても、私共二人は一緒になつて居られさうもないからです。馬橋は何時でも貴様なんぞに芸術家の心が解つて堪るもんと口癖のやうに申しますが、馬橋の心では、つまり芸術家の家族は犠牲にならなければならぬと言ふのです。如何にも犠牲にもなりません。しかし馬橋のやうな間違つたものゝ犠牲になるのは私は厭です。まだ今日までこんなことを申上げたことは御座いませぬが、その無責任たら、お話しにも何にもなりません。

いつでしたか如何無責任なんだねと先生から訊かれたことが御座いましたつけ。如何ツて一々は申上げられません。朝から晩まで私達の生活を御覧なすつて始めてわかることゝ存じます。(四十五)

敏子は意識して書いているかどうか判らないが、ここで批判の矢面に立っているのは馬橋の無責任さであると同時に、女性を周縁に追い遣ることで成立する清の論理でもある。^[26]要するに清の自己肯定の論理とは、明治民法が裏付ける家父長制の論理に、素朴な芸術至上主義イデオロギーを都合よく接ぎ木して拵えた、身勝手かつ情況迎合的なものにほかならず、敏子の言葉は、その欺瞞を穿つだけの批判性を備えていた(ただし問題は、テキストが、この〈対話〉の契機を活かすことなく、敏子がますます言葉を失っていく、という点にある)。

いっぽう、この手紙によつて、どうして清が二人の住居を訪ねたがらなかったのか、その無意識的な抑制の理由もほの見えてくるように思われる。つまり、清はおのれの拠つて立つ論理の卑怯さを直視しなくなつたのである。「自分にも無論責任はある……それは自分も知つてゐる。しかし自分だつてこれに対して、随分多

くの犠牲を払った、「自分は少くとも馬橋の為に尽した(四十〇)などと清は自責の念に駆られている様子を見せてはいるが、この弁解にまったく説得力は感じられない。なぜかという、彼の言動に「犠牲」や「献身」が読み取れないからだ。さらにいうと、こうした自己弁護をテキストはまったく相対化し得ていないため、結果的に『縁』は、身勝手で自己保身的な清の論理をほほまることが肯定してしまう結果となっている。結局のところ「蒲団」のリライティングとしての『縁』は、露骨な自己正当化の欲望を隠そうとしないテキストであるといえるが、以上のような理由から、その自己正当化が(読者に対して)成功しているとは決していえないだろう。主人公を評して「その男は余程図々しかった」と言い、「ライフ—かうした言葉は百二十三箇所もあった。赤坊が啼くのにも、猫が鼠をとるのにも、真面目なライフを見出すであらう」と嘲笑する同時代評があるが、これなどは『縁』に示された主人公の理屈に対して露骨に不快感を抱いた読者の反応として読むことができる。

ともあれ、こうして敏子は犠牲を強いる新しい「家」を出て、ふたたび清の「娘」に戻る(一)のだが、その代償として彼女は、認知されない子供・静を抱えることになった。明治民法では、婚姻中に懐胎した子は夫の子として嫡出子、親の不明な子は私生子、父が認知した私生子は庶子とそれぞれ呼ばれた(現行民法では、私生子と庶子を含めて「嫡出でない子」と呼ぶ。敏子の「この籍だけは貴方の方に入れて下さい。私の方には持つて行くところがないんですから」(四十四)という馬橋への懇願の言葉は、明治民法下に出生した子が「父」の認知によってしか国家に分節され得ないという不条理を訴えたものである。

結局、父に認知されないまま離別した静は、私生子として生きること余儀なくされた。もちろん、このことの直接の原因は両親の不和であるが、服部清に責任がなかったとはどうい言い切れないだろう。そもそも「公けの結婚届」不在の同居生活を二人に促したのは清にほかならないのだから。

このように、「蒲団」スキヤンダルに端を発するさまざまな問題を、女性の交換や贈与によって解消してきた服部清であるが、最後にそれらの剰余とも呼ぶべき私生子が残されることになった。そして、ここでふたたび「女性の贈与」と「田舎寺」というふたつの主題が物語に現れることになる。それは私生子・静の山崎雍之助への譲渡である。

『僕が育てゝやらうか』

突然かう山崎が言ひ出した。

『でも……君が育てゝ呉れるツて言ふ訳にも行くまい』

笑ひながら清がかう言ふと、

『何に、構はんさ。今一人位子供がなくつちや淋しくつていけないんだよ。君の子供を一人呉れると好いけれど、君は中々手離しが出来さうにもないからねえ』

山崎の言ふことは満更戯談でもなかった。(五十)

静は清の実子の代わりに雍之助に贈与され(家)の外側に排除され、これでこのテキストにおける「女性の交換」はひとまず完結する。そして同時に、テキストから、清に拮抗あるいはそれを脅かすような他者の言葉は一掃されてしまったといつてよい。清を中心とした擬制の「家」の完成である(複雑に入り組んだ姻戚関係図を思い浮かべてみてほしい)。

このテキストにおける(田舎寺)というトポスの果たす役割の重要性についてはすでに指摘しておいたが、ここであらためて、その性格を次のように確認しておこう。すなわち『縁』は、東京郊外の服部家を中心に渦

巻く愛憎入り乱れた混沌（秩序の危機）を、〈田舎寺〉というメタ・レヴェルを介在させることでクール・ダウ
ンし、もういちど秩序（家父長制）の内部へと回復させるテキストである。その際、男性相互の関係が更新・
再構築されるのに対し、女性たちの声はつねに埒外に置かれたままである。今回の静の養子縁組についても
取り決めたのはただ男二人のみであつて、双方の妻や母親である敏子の意向が顧みられたような形跡は、少な
くともテキスト上にはないのである。

六 一九一〇年代文学としての『縁』

志賀直哉「児を盗む話」（一九一四）^{〔大正三年四月〕}「白樺」の主人公は、家父長制度的な「家」、ことに「父」
から自由になるために、家出をし、尾道に部屋を借り、そこを「家」理念に反逆するための「個室」にしつら
えた。もちろん、この「個室」とは、武田信明が指摘するように、同時代における新しい空間意識の表れで
あり、それはまた「家庭という概念を破壊する」思想でもある。

しかしほどなく主人公に「個」であるがゆえの無聊が襲いかかる。そこから逃れるために彼は何をしたか。
見知らぬ他人から女の子を盗み去ってしまうのである。かくして「家」理念への反抗の場としての「個室」は、
擬制の「家」に転じ、そこで彼は、知らず知らずのうちに「父」を模倣し、「子」に対して理不尽な力を振る
つてしまう。

駆けつけた巡査に対して、出刃包丁を逆手に握って構えていた主人公は、結局何の抵抗もしないまま捕縛さ
れる。おそらく彼は、その瞬間、この部屋が反家父長制度的な「個室」などではなくて「家」になってしまっ
ていたこと、自分が「父」を模倣していたこと、出刃包丁を持つてその「家」を守ろうとしていたことに気付
いてしまったのである。「児を盗む話」は、このようにして、「家」理念からの逸脱の困難さと、矛盾する志向
性を内面化した社会的存在としての自己という困難を炙りだしてみせたといえよう。

花袋の『縁』にあきらかに欠落しているのは、この出刃包丁を握りしめたまま茫然自失として立ち尽くして
しまった主人公の内省のプロセスである。鹿野政直が指摘するように、一九一〇「明治四三」年前後は「文学
というかたちをとって、「家」問題を提起しようとする気運が急速にたかまってきた」時期として記憶される。
もちろん、こうした気運の背景には、日露戦後の緊張感の弛緩を補正しようとする雰囲気、より具体的にいえ
ば、一九〇八「明治四二」年に桂太郎内閣が明治天皇に要請・発布した「戊申詔書」をひとつの指標とするよ
うな、国家による国民思想の統制強化が存在することはいままでもない。「早稲田文学」（一九一一「明治四四」
年二月）の「明治四十三年文芸資料」は、次のように情况分析をしている。

更に／＼昨年の文壇について特記すべきことは、官憲並びに旧思想を抱く社会が必死の力を以て文壇の新
思潮に圧迫を加へ出した一事である。出版物の発売禁止、演劇興行の取締、思想家に対する警戒、全国の
図書館に於ける危険なる図書の閲覧禁止、学生の読書制限等政府の手を以て、一般社会と文芸界乃至思想
界との間に障壁を厳としやうとした事、昨四十三年の如きは蓋し嘗てない所であらう。なほ之に加ふるに
和漢古典の翻刻の出版の頻繁にして而もその売行の多かつた事のやうな奇異な現象の生じたことの昨年の
如きは以前になかつた所である。更に又旧思想の学者教育家等が焼氣となつて常識本位旧道德本位の修養
談に努めたことも昨年の如きは少なかつた。嘗て無き所の大陰謀を企て、社会の耳目を振動させるやうな
事件もあつた。

これらを通観した上で、この記者は「之を要するに新時代対旧時代、思想対実生活、文芸対社会等の問題が、

昨年の如く痛切に世人の胸に響いた事は恐らく過去の我国にはあまり類を見なかつた所であらう」とまとめているが、大逆事件を政府の思想弾圧と同列の「実生活」「社会」問題としてひと括りにし、「文芸」とは一線を画すものとして措定し、そこに安住してしまう思考の粗雑さに、このときの「早稲田文学」的な〈観照〉の危うさが象徴的に現れている。そしてそれは、『縁』の服部清が、敏子や馬橋らの葛藤や模索、あるいは異議申し立てを「実行」の一語のもとに膠もなく斥けたことと相似形をなしているといつてよい。

同じ「娘を盗む」モチーフを共有する『縁』と「児を盗む話」とを比べてみたとき、前者があまりに安易で自分勝手な自己肯定の理屈によって成り立っていることは一目瞭然であろう。服部清もまた、自己に服従を強いる環境から逃れ、「個」を回復させるための手段として新たな「家」を（おそらく無意識的に）構築した。しかし、彼はその擬制の「家」が何を蹂躪しながら成り立っているのかについて、いっこうに自覚的でなく、むしろ、その抑圧のシステムを手放しで肯定し、巧みに利用しながら、自分と反りの合わない者を次々と去勢していつてしまふのだった。このとき清が、他方で、「家」を脅かす心配のない「深川で生れた女」（飯田代子）との安定した関係を築き、自己崩壊のリスクを取り除いていたことは、「貞婦を美德の極地におき娼婦をその対極に位置づけつつ、しかも後者をもって前者の必須の補完物とする」「家」的³⁰道德観念の構図にもの見事に合致している。しかも、この女性³¹は「何処か敏子に似たところがあつた」（三十九）という。つまり、敏子の形代でもあつたのである。

『縁』というテクストにとつて救いなのは、物語の結末で、敏子と馬橋がふたたび清のもとを去つてしまい、これによつて、その反動的な側面が中和されているようにみえることだろう。これによつて『縁』は、かろうじて一九一〇年代文学としての面目を取り繕うことができた、ともいえる。ただし、この結末が果たしている役割について花袋が意識的であり、清的な立場と敏子＝馬橋的な立場を止揚せんとする構想があつたとは到底思えない。というのは、これから検討するように、『縁』執筆当時の花袋が、服部清とまったく同じ口調で〈観照〉の境地の重要性を説いていたからである。

石川啄木は、自然主義文学の傍観的態度に否定的立場をとり、「時代に没頭してゐては時代を批評する事が出来ない」と述べたが、この時期の花袋こそ、因襲を打破するために因襲をなぞつてしまつた作家の典型的な³²であつた。

七 〈観照〉の果て

私生子である静の譲渡が男同士によつて取り決められ、まさに「家」が完成した当日、清と雍之助との間で〈観照〉の重要性についての会話がなされていたことに注意しておこう。同時代評以来、『縁』はその主情性ゆえに、作者の客観的態度の後退を指摘されてきた³⁴が、これから考察するように、主観的な言述の有無が客観的描写の出来・不出来を決めるという判断の仕方は、少なくとも花袋の場合、生産的でないように思われる。いやむしろ、世評において主観的と断じられた『縁』こそ、もつとも明確に花袋的な〈観照〉の機構を体現している、とさえ思われるのである。

さて、無二の親友であり、義理の兄弟でもある二人は、「新時代」の人々のことを噂する。馬橋や敏子らの生き方は「刹那を重んずる」もので、「刹那の快楽なり悲痛なりに意味があるので、それから来る結果などは何うでも好いといふ」盲目的なものである。しかし、「自然」はそのように盲目的なものではなく、「ちやんと未来が平凡に定つて居ると言へば定つて居るのだ」。「自然はちやんと其行先を見せて置いて、そして刹那の上では、人間に見すかされないとこがある」。だから「恋だとか何とか言つて、大騒ぎをした処で、それは何にもなりはしないのさ。時は忽ちにして過ぎて行つて了ふのさ……」（五十）。

「刹那」なり「悲痛」という術語が岩野泡鳴を意識して選択されたものであることは間違いないが、この「刹那の快樂なり悲痛」は全否定されているわけではない。なぜなら、この「盲目」性はかつての清々雍之助自身の姿でもあるからだ。ただし、清々雍之助と敏子らを隔てるのは、刹那的な快樂や悲痛を時間的・空間的に相對化する、三人称・過去のな「觀照」の視座の有無であり、ここで花袋と泡鳴の志向性の乖離は決定的なものとして確認できる。^[36]そして、ここで『縁』は、テキスト外の「実行と芸術」をめぐる同時代の議論に、ほぼそのまま接続させることが可能になる。

「事実実行を其のまゝ保留して同時に觀照するといふことは、其実行が全力的であればあるほど困難になる、人力では殆ど全く不可能になる。だから觀照は是非とも実行の手を休めて過ぎ去つたものに回顧する瞬間の外起こらなくなる、此事実を芸術の客觀化といふに外ならない」とは、島村抱月「第一義と第二義」(一九〇九「明治四二年六月六日、読売新聞」)の主張であるが、田山花袋は同じ問題を次のように論じている。

泡鳴君の靈肉一致、無理想無解決、殊に刹那主義は甚だ賛成である。私も主觀と客觀とを分けて論じたくはない。けれど私は其作者の心持を実行する処に至つて泡鳴君と少し考へが違つて居る。泡鳴君に言はすれば実行しなければ其作者の心持が充分に出て来ないと言ふに相違ない。それは事実だ。けれど其の実行の巴渦の中に身を没入して、普通の人々が違つて居るやうに、眼も開かず其実行の中に居ては、其實際の真相が解らないのもまた事実である。吾々は鋭敏な感覺を持つて居つても、猶ほ且つある時日を経過するか、ある説明を待たなければ、其時の心的状態乃至外面事実を即座に明かに知り得ることの出来ないものである。^[36]

花袋は抱月の立場に一定の留保を挿入しているが、両者の見解に基本的な相違はないと見てよいだろう。このことは、抱月や花袋ら「觀照」論者が、そろつて「本能」的なものを相對化する審級として「經驗」と、その「經驗」を相對化する「意識」「知識」を指定し、重要視していることから確認できる。たとえば、抱月は「今まで右でも左でも自己の利害といふ岩石にぶつかつては激してゐた感情の浪が、其の岩石から距てられて、始めて過去經驗の一切を含蓄する自己内の人生図の海に平衡を得た意識」によつて「觀照の態度」が可能となると述べている。^[36]そして、やはり花袋も「離れた心」を得るためには「經驗」と「知識」が必要だといふ。

人間には經驗といふものがある。また刺激するものを細胞が好まぬという性がある。厭な經驗は二度としない。痛い刺激物は成たけ避けたい。けれど其經驗を二度も三度もさせられると平氣になる。感じが薄くなる。この平氣になり感じが薄くなりかけた処に知識の力が出て来る。知識の力が出てくると、自己が痛みと苦しみを感じてゐるといふよりは、その感じを見てゐるといふ形になる。^[36]離れた形になる。

両者の主張によつていみじくも明らかにされているのは、字義通りの「觀照」は不可能であるということである。すなわち、抱月・花袋のいう「觀照」とは、先入見を排した「無私念無執着」^[40]な対象把握などではなく、ある特定の社会的・文化的經驗から導き出された知を、世の中の出来事に対して演繹法的に適用し、把握することだったのである。そしてここに、『縁』に具現していたような、あきらかに偏向した「觀照」が成り立つだけの隙間があったことになる。右の引用の顰みに倣つていえば、服部清らの「觀照」の境地とは、明治民法下において身体に染み込んだ規範(家父長制)を基盤にしつつ、さらにその上に、女性に二度と自分の生活を

荒らされたくない（厭な経験は二度とたくない）という苦い経験^{〔4〕}を塗り固めたもの、である。「実行」と「芸術」との峻別を自己の使命と感じていたであろう「芸術家」田山花袋が逢着したのは、この地点であった。抱月が「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」（一九〇九「明治四二」年六月、『近代文芸之研究』）の中で、旧来の道徳を離れ得ない自身の苦しい胸中を告白したと較べると、花袋の態度は開き直りといってもよいものである。牟田和恵によれば「先進的で性と家族の新しい道徳を求める慎重深い人々と近代国家の両者は、伝統的・因習的な制度や習俗に対してはたやすく同盟関係を結びうる」というが、まさにこの図式は〈観照〉〈傍観的態度〉の名の下に花袋デクストが推し進めていたことに合致しているといえよう。

ここで批判されるべきなのが、〈観照〉という題目の欺瞞性であることは明らかであるが、同時代的な議論の中で〈観照〉の不可能性や倫理的欠陥はすでに問題化されていた（そもそも、泡鳴の一元描写論が問題視したのはこの点であったし、その虚偽性を隠蔽したのが「大自然の主観」というイデオロギーだったことについてはすでに和田謹吾による指摘がある。これらに対し、ここで付け加えることができることは、かつて花袋がこだわっていたはずの方法、すなわち、「眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくな」った主人公のまなざしに内的焦点化しながら物語世界を構造化する方法（ここではこれを、第六章での考察をふまえ、〈描写〉と呼んでおこう）が、『縁』に至って、ほとんど見る影も無くなっているという事実と、まぎれもなくそれが〈観照〉の導入と不即不離の関係にあるということである。

二人が寺に居る間に、清も一度東京から訪ねて行つた。

其時も久喜あたりで乗客は大抵下りて了つて、二等室には清の他に足利あたりの商人らしい男が一人乗つて居るばかりであつた。夕日が車内に一杯にさし通つて、遠くに碧い山を見せた平野は、村やら林やら川やらを段々其前に展いて見せた。其日は何故か清の胸は微かな顫動を感じて居た。敏子に就いての追懐が漣のやうに静かに綾をなして打寄せて来た。

物語の中の一章を一頁々と翻して居るやうな気がして仕方がなかつた。かれはこれから先の一章を考へた。また最後の一章のいかに結ばれて行くかをも想像した。青年からの親友で且つ妻の兄なる山崎が、かうして敏子の子を養育することになったといふことも一種不可思議の縁のやうに思はれた。（五十三）

『縁』において、有意味なできごととは、本質的に過去に属するものからなっている。つまりここには、不意に主体を脅かすような「眼前焦眉」のできごと（の〈描写〉）は存在しないのだ。その代わりに、過ぎ去つたものの堆積の中からいくつかの断片が抽出され、並べられ、そこに「物語」が作り出される。ここでは、記憶や想起が重要な役割を果たし、想起と同等に忘却され、「物語」から排除されたものもまた堆積する。これが『縁』における〈観照〉の実態である。ただしこのとき、有意味であることとはいったいどういうことなのか、想起＝忘却する主体はいったいだれなのか、どんな資格があつて有意味／無意味の間に一線を引くのか、忘却されたものはいったいどこへ行くのか。こういった問題についての花袋の意識は、明らかに「蒲団」などを書いた頃から後退しているように思われる。

「われわれは現在の出来事を「描写」することはできるが、過去の出来事を「描写」することはできない」と、野家啓一は述べる。「過去の出来事は「描写」されるのではなく、こう言つてよければ想起的に「構成」されるのである」。その意味で、次の柳田國男の批評は〈描写〉から派生した〈観照〉〈傍観的態度〉の非描写的な本質をするどく衝いたものといえる。

此れを書くに当つて其材料は豊富でありながら初めから結構を作つて居る、此の作は動機^{モチフ}を以つて書いて居る、其の動機^{モチフ}と云ふのは標題の生で現して居る事を初めから現さうとして居る、充分な材料の中から此の小説にする分文を抜き取つた小説の様に思ふ。初から或る概念の下に材料を選択して懸つて居る、一種の趣巧から出来て居る。枯葉の後から芽が芽ぐんで居るのは落すべからざる事実である、其れが全篇の楔子^{けし}である如く予め中心点を拵らへてかゝつた事は明かである、作者の態度は結構を超脱したとは云ふが広い意味の結構があつたのだ、此れを真の自然主義の作品であると見るならば旧來の約束に服従せねばならぬ。

これは『縁』ではなく『生』への柳田の批判であるが、ここで柳田が見抜いた「作者の態度」は、同時代評がこぞつてその客観描写（平面描写）を肯定的に評価する中で異彩を放ち、正鵠を射ていたように思われる。そしてその射程は、『生』のみにとどまらず『妻』『縁』における〈観照〉の虚偽性にまで及んでいるといえよう。

これまでみてきたように、〈田舎寺〉に象徴される〈観照〉の場合は、このテキストにおけるいわば超自我として、利那的に放散しようとするエネルギーを去勢するために機能していた。その去勢の果てにこそ、「静な観照の態度⁴⁷」が実現していたわけだが、同時にそれは、常に超然的たらんとするゆえに、ある見過ごしがたい錯覚を許してしまうような場所でもあつた。この問題を確認するために、もういちど『縁』のこの一節を見よう。

十三年の歳月は短くはなかつた。さまざまの世態や事件が其前に展けた。明治の思想もいろいろな変遷を見せて、社会主義が起つたり、日露戦争があつたり、自然主義が其萌芽を出し始めたりした。友達の群にも栄達したものもあれば、零落したものもある。しかしかくれた人に取つては、そんなことは何うでもないやうに見えた。（二）

ここで問題にしたい錯覚とは、あの戦場を歩む「一兵卒」の側から世界をまなざそうとする意志を「そんなことは何うでもない」と言い退けてしまうような錯覚である。社会主義も日露戦争も自然主義も、それぞれの当事者の声が発生する固有の経験の現場を無視し、一括りにし、なかつたことにしてしまおうとする「忘却の暴力⁴⁸」である。そして、それは大正期の花袋が辿り着いたといわれる宗教的境地とさほどの隔たりがない地点だつたように思われる。

欧州戦に於ける無数の人間の死傷は、人類主義から云へば非常に恐ろしいことである。又飽まで平和運動をすべきである。しかし、現象、自然と云ふ方から見、又は深い不可思議な心理から見ると、そんなことは小さなことである。一木一草の枯れたのとさう大した違ひはない。日は矢張かゞやきつつある。人間は矢張り棲息しつゝある⁵⁰。

つまり、『縁』の〈田舎寺〉とは、「宗教」の名を借りた傍観^{デタツチメント}（触れないこと）を胚胎し予告するトポスにほかならなかつたわけだ。そして見過ごせないのは、この〈傍観^{デタツチメント}Ⅱ観照〉が、「欧州戦に於ける無数の人間の死傷」という出来事の忘却を正当化する思考回路を提供していることである。しかしそもそも花袋にとつて、〈観照〉とは〈事実の真相〉を解するための方法ではなかつたのか。現実^{リアル}を直視するためのリアリズム理論としての〈傍観Ⅱ観照〉は、やはり根本的な欠陥を抱えていたといわざるを得ない。

八 おわりに

このように、〈観照〉が花袋テキストにもたらしたものは、単なる三人称・過去のな「描写」の態度にとどまらない、もつと重たいものだったように思う。それは、小さな「声」の持つ可能性の抑圧とでもいうべきものである。市村弘正は「小さな言語」の意義について、次のように述べている。

困難ないくさを戦うものが小さな人間であるかぎり、何よりも話し手の姿とその話し方が現れるだろう。そして、かれらによって担われる、意味のレベルに還元できない「声」が現れるだろう。その姿も語り口も、話し手一人一人において異なっているだろう。小さな言語の小ささを担保するこの異質性は、国民文学的言語の平準性にどこまでも逆行する。統合の圧力によって追いつめられるとき、小さな言語が切れ切れに露わにするのは、このような存在の不均質さそのものだ。それは地域の生活を離れた統一にはなじまない抗体である。

「地域の生活を離れた」個人言語の存在を認めなかった柳田國男が、龍土会に最後に出席したのは一九一〇年七月六日、『縁』の連載が佳境に入った頃であった。柳田が花袋の「小さな言語」からなる小説の題材の提供者だったこと、また、彼が『重右衛門の最後』を褒め称え、「蒲団」をきっかけに花袋から離れていった経緯はつとに有名であるが、彼が「蒲団」のライティングとしての『縁』（三部作に柳田は「西」という名で何度も登場し、旧友同士の絆が確かめられる）をどう読んだのか、たいへん興味のあるところである。というのも、物語の発生的・伝承的な論考を通して、女性や子ども、悪人、ウソつきなどの「小さき者の声」の存在意義を訴え続けたのが、柳田國男にほかならなかったからである。彼の発想・発言は、「空想の自由を取戻すため」、すなわち、素朴な写実主義への批判であると同時に、特権的な立場に立つ都会の知識人たちの私生活の報告がうやうやしく歓迎されるような情況への異議申し立てでもあった。なお、彼の「小さな言語」を拾うライフワークの端緒ともいえる『遠野物語』の刊行もほぼ同じ時期、一九一〇年六月のことであった。その刊行に際し花袋は、柳田に「君には僕の心持は解るまい」「君には批評する資格がない」と言われたと臆面もなく明かしているが、花袋には、このように告げ、みずから「縁」を切ろうとした旧友の心境を付度することができたのだろうか。この両者の絆の断絶を「日本的近代の不幸な縮図」と述べた相馬庸郎は花袋に対しやや同情的なようであるが、やはりこの断絶は必然のなりゆきであった。『遠野物語』と同月に、花袋は博文館から『花袋叢書』を上梓、その序文にあたる「著者略歴」で「平生最も感化を受けし友人二人あり。一は柳田國男氏、一は故國木田哲夫氏なり」と記したが、両者のすれ違いは明らかである。

〔注〕

- 1 「蒲団」発表と同月の「文章世界」に、花袋は「触れるといふこと」(のち『花袋文話』、一九二一「明治四四」年二月、博文館)という文章を書いている。「写生を鼓吹したため、写生的文章は随分沢山に集るが、此の写生的文章でさへ、虚偽が多い、虚飾が多い、色彩が多い、今一步進んで、一種旧式な型に支配されて居る。何うも実際に触れて居ない」。
- 2 市川浩『〈身〉の構造——身体論を超えて』(一九八四年一月、青土社)
- 3 『言語にとつて美とは何か』第I巻(一九六五年五月、勁草書房)
- 4 曾根博義「描写」と「語り手」——田山花袋の描写論とその実際(中西進編『日本文学における「私」』、一九九三年)

一二月、河出書房新社）は、花袋の「描写」が横光利一の「純粹小説論」にまっすぐつながっていると指摘している。

5 「リアリズムの源流」再考―徳田秋聲の初期―（一九九四年九月、『論樹』）

6 「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」（一九一八「大正七」年一〇月、『新潮』）

7 岩野泡鳴「文界私議（八）」（一九〇八「明治四二」年三月二十九日、読売新聞）

8 泡鳴は、「文界私議（四）」（一九〇八「明治四二」年一月二十六日、読売新聞）で、漱石の『鶏頭』「序」について、「これは虚子を推薦した言葉と見るよりも、渠自身の弁護と見做す方が適當であらう。昔の戯作者風を喚起しようとするのであつて、渠は實際たゞ学問ある戯作者に外ならない」と批判している。

9 「觀察者の個人主義―岩野泡鳴『均質な風景』の棄却―」（一九九九年三月、『国文学研究』）

10 田山花袋『東京の三十年』（一九一七「大正六」年六月、博文館）

11 「誠に申訳かない、御詫しますから何うか堪忍して下さい」と書き始められる手紙を花袋が岡田美知代に送ったのは、一九〇七「明治四〇」年九月一日のことである（田山花袋記念館研究叢書第二卷『蒲団』をめぐる書簡集、一九九三年三月、館林市）。また、モデル側からの不満は、永代美知代「ある女の手紙」（一九一〇「明治四三」年九月、『スバル』、『里子』（同二〇月、『スバル』）、『蒲団』『縁』及び私（一九一五「大正四」年九月、『新潮』）にうかがうことができる。

12 結秀実『『帝国』の文学―戦争と「大逆」の間―』（二〇〇一年七月、以文社）。本章は、三部作の主人公の家父長制的なイデオロギーを扱うが、花袋における父権の問題は、すでに本書において詳細に論じられている。なお、三部作に、新しい家の成立というモチーフを読んだのは、平岡敏夫『日露戦後文学の研究』下巻（一九八五年七月、有精堂）である。ただし、雍之助や敏子、さらにその父たちをも疑似的な家族に取り込んでゆく『縁』家成立のプロセスについての言及はない。

13 國木田独歩、松岡（柳田）國男、田山花袋、太田玉茗、嵯峨の屋おむろ、宮崎湖處子による『抒情詩』は、一九〇一「明治三四」年四月に、民友社から刊行された。ちなみに『縁』には、独歩、柳田、玉茗らをモデルとする人物が登場する。

14 第十章を参照。なお、『縁』の作品中、山崎雍之助は超俗の境地を体現したキャラクターとして描かれているが、『花袋周辺作家の書簡集一』（田山花袋記念館研究叢書第三卷、一九九四年三月、館林市）を読むと、自作の詩などの雑誌掲載の幹旋を花袋にたびたび依頼している玉茗の姿が明らかに浮かび上がってきて、そこに超俗的なイメージをうかがうことは困難である。

15 『妻』にこのような記述がある。「お光（注Ⅱ『縁』の妻）は達つて懸望されて此処に嫁いで来たのである。まだ年も若いし、裁縫も十分稽古させて無いし、殊に、学問にかけては何も出来ないから……と長兄が幾度も断つた。それにも拘らず、何が出来なくつても好いからと達つて望まれて来たのである」（四）。

16 光石亜由美は、女性たちを「生殖」「出産」の領域に囲い込もうとする志向性が同時代の花袋の短編「白紙」（一九〇九「明治四二」年一月、『早稲田文学』）や「畏」（同二〇月、『中央公論』）などにうかがうことができると指摘している（『生殖恐怖？―夫婦の性愛と田山花袋「畏」、二〇〇三年八月、叙説』）。なお本章は、「客観」「傍観」というのは多分に男性ジェンダーに偏った視点であることは確かである」という光石の指摘（『自然主義の女―永代美知代「ある女の手紙」をめぐる―」、一九九九年二月、『名古屋近代文学研究』）に大きな示唆を得ている。

17 飯田祐子『『こころ』的三角形の再生産』（『彼らの物語』、一九九八年六月、名古屋大学出版会）

18 「蒲団」における二つの告白 誘惑としての告白行為『語りの近代』（一九九六年四月、有精堂）

19 明治四二年二月に花袋宛に送られた書簡と推定されるものである（『花袋周辺作家の書簡集一』、注14参照）。

20 頼夫『縁』を読む（一九一〇「明治四三」年二月、『新潮』）

21 「センチメントと描写法」（一九二一「明治四四」年二月、『早稲田文学』）

22 『男同士の絆』（上原早苗・亀澤美由紀訳、二〇〇一年二月、名古屋大学出版会）

23 『蒲団』をめぐる書簡集（注11参照）

24 梅謙次郎『民法要義 卷之四親族編』（二八九九「明治三二」年三月、有斐閣）、湯沢雅彦『明治の結婚 明治の離婚

——家庭内ジェンダーの原点』(二〇〇五年二月、角川選書、上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』(一九九四年三月、岩波書店)などを参考にした。

25 『田山花袋研究——博文館時代(三)——』(一九八〇年二月、桜楓社)

26 岸規子は「酒や女に溺れ、借金を重ねていく馬橋の自己欺瞞を敏子は鋭くついている。(中略)そして見方を変えるなら、敏子のつきつけた問題は清にも当てはまる点に注意しなければならない」と指摘している『田山花袋作品研究』(二〇〇三年一〇月、双文社出版)。

27 注20と同じ。

28 『個室』と『まなざし』(一九九五年一〇月、講談社選書メチエ)。なお、「児を盗む話」における〈個室〉の意味とその破綻の必然性については、伊藤佐枝「志賀直哉初期作品に於ける〈部屋〉という居場所——『児を盗む話』を中心に——」(二〇〇二年六月、『都大論究』)に指摘がある。

29 『戦前・『家』の思想』(一九八三年四月、創文社)。なお、日露戦争後の文学に描かれた「家」については、吉田精一『自然主義の研究』上巻(一九五五年二月、東京堂)、平岡敏夫『日露戦後文学の研究』上下巻(注12)などを参照。

30 鹿野政直『戦前・『家』の思想』(注29参照)

31 「芸術家の心」『インキ壺』、一九〇九[明治四二]年一月、左久良書房 というエッセイの末尾に、「名妓にして猶且つ人の妻たるを望み、名僧にして猶且つ家庭の人たらんことを思ふ。一にして二たる、真に難し」という、呟きとも嘆きとも見える一節があるが、要するに花袋の欲望と煩悶は、家庭から欲動を排除することによってしか解決できないようなものだ。それを僧侶に喩えるレトリックは自己正当化のための詭弁にすぎないが、文章からは羞恥の一片も伝わってこない。

32 「時代閉塞の現状」(強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察)「(一九一〇[明治四三]年八月)。引用は、『啄木全集』第四巻(一九六七年九月、筑摩書房)による。

33 次のような『縁』刊行(一九二〇[明治四三]年一月)前後の複雑な背景も考慮に入れるべきであろう。大逆事件の影響で文芸の取締りが強化され反発が強まる中、雨声会が第五回を迎え(同一年一月三日)、また文壇側からも文芸院の設立が提唱されるような気運があった。たとえば、金子筑水「文芸及思想の取締」(同一年一月、『太陽』)は、「今のところは、さしあたり、文芸院の設立でもよい」と述べ、自然主義への敵意を剥き出しにしていた雑誌「新小説」の「小評論」欄が、この筑水の提言に対し賛意を示した。他方、花袋が主宰する「文章世界」は、同一年一〇月に「現代青年に与ふべき主義もしくは主張」と題する特集を組み、当時の教育界を代表する四人(井上哲次郎、高田早苗、鎌田榮吉、澤柳政太郎)の意見を集め、話題を呼んだ。いうまでもなく、文芸取締りの矛先が向けられていた自然主義の一大拠点としての「文章世界」が、みずから自然主義や社会主義の弊害について論じた意見を求め、掲載したからである。

34 たとえば生田長江は、『縁』の描写の背後に作者の「眼鏡の色」の濃さを読み取り、「題意からして已に無理心中を、含意の心中と言ひ立てるやうな、作者の主観になつて居る」と述べ、『生』の傍観的態度からの退行を指摘している(「花袋氏の小説」、一九二一[明治四四]年三月、『新小説』)が、この論じ方が、のちに触れる柳田國男の花袋批判(注46参照)と基本的に同質であることに注意したい。

35 しかしそれにしても、花袋と泡鳴の対照はそれほど自明なものなのだろうか。なるほど、「観照」という〈語り〉のメタ・レヴェルの是非をめぐる両者の立場の違いは明白である。ただし、これまで見てきたように、花袋的な「観照」は、女性の贈与に象徴されるような徹底的な他者の言葉の排除と表裏一体のものであった。このとき三人称の語りは、多声的な対話の場を構築することが可能であるにもかかわらず、ホモソーシャルな均質性こそを主たる目的地点として運動をくり返し、結局、最後には「家族／非家族」という矮小化された二元的世界に落ち着いてしまった。いっぽう、これに対する泡鳴の一元描写はいえ、これもまた、三人称の語りの枠組みにおける意識的な他者の言葉の排除に逆説的な価値を見出そうとしたものではなかったか。

36 「心持と書き方」『インキ壺』注31参照

37 「現代作家の苦悶」『インキ壺』注31参照で花袋は、抱月の提言に応え、「これは確かにさうであるが、私は実行と観照との距離に就いて考へて見た。距離が遠くなればなるほど、芸術は生気を失つて来ないかと思つた。私は成だけこの距離の近い処に居たいものだと思う」と一定の留保を挟んだ上で賛意を示している。

38 島村抱月「芸術と実生活の界に横たはる一線」(一九〇八「明治四二」年九月、「早稲田文学」)

39 「人格問題」『小説作法』一九〇九「明治四二」年六月、博文館)

40 田山花袋「生」に於ける試み」(一九〇八「明治四二」年九月、「早稲田文学」)

41 『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』(一九九六年七月、新曜社)

42 たとえば、徳田秋江「島村抱月氏の「観照即人生の爲也」を是正す」(一九〇九「明治四二」年五月一六日、「読売新聞」)。

43 たとえば、石川啄木「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(一九〇九「明治四二」年二月、「スバル」)。

44 「平面描写」論の周辺」『描写の時代——ひとつの自然主義文学論』一九七五年一月、北海道大学図書刊行会。和田は、「大自然の主観」が必要とした「精神の修養」が、いわゆる「野の花」論争以来、花袋によって一貫して強調されていたことに着目して、「花袋の自然主義の知識は、実はやはり「作者の主観」(明治三四・八、『新声』で述べていた理解をなにも超えていないと論じているが、これは具体的なテキスト分析を欠いた性急な結論といわなくてはならない。たしかに、明治三十年代半ばの花袋の論調と「実行と芸術」期の花袋の論調との間には一貫性が認められる。この点について異論はないし、むしろ、この一貫性をもっと肯定的に捉えられるべきものであると考える。ただし、その一方で見極めなくてはいけないのは、その滑らかに見える水面下で何がどう変質しているのか、である。明治三十年代半ばの花袋の課題は、第四章でも考察したように、おのれの「センチメンタリズムの破壊」という、あくまで個人的な問題だった。これに対し、目下の花袋にとつての課題はより大局的な見地からのもので、「芸術」から「実行」を排斥することにあつた。

45 『物語の哲学——柳田國男と歴史の発見』(一九九六年七月、岩波書店)

46 「生」の合評」(一九〇九「明治四二」年一月一七日、「読売新聞」)

47 島村抱月「芸術と実生活の界に横たはる一線」(一九〇八「明治四二」年九月、「早稲田文学」)

48 岡真理『思考のフロンティア 記憶／物語』(二〇〇〇年二月、岩波書店)

49 『縁』の連載開始に重なる頃の花袋の評論に、「社会の圧迫よりは寧ろ本能の圧迫」(一九一〇「明治四三」年四月、「文章世界」)がある。これは自然派の作品に、社会性が欠けているという世評に対する、花袋のひとつの答えである。そこで花袋は、ロシア文学やイブセン劇などが社会的な圧迫を題材に描いていても、自分はそれを社会的圧迫とは受け止めていない、と告白している。では彼はロシア文学やイブセン劇の何に共鳴していたのか。それは「個人的圧迫に対する共鳴」である、と花袋はいう。「成る程、今日の我々にも、多くの圧迫がある。けれども、それは主として個人それ自身の圧迫ではないか、年齢の圧迫ではないか。本能の圧迫ではないか。少くとも社会的実際の生活より来る深刻なる圧迫と言ひ難い」。つまり、花袋は確信犯的な主題のすりかえ(誤読)をしているのである。なお、この評論に着目した相馬庸郎は、「啄木にとつての「時代閉塞の現状」が花袋にとつては「閉塞」でもなんでもなかった」と述べている(「田山花袋の「実行と芸術」」、『日本自然主義論』一九七〇年一月、八木書店)。

50 「自らを信ぜよ」『毒と薬』一九一八「大正七」年一月、耕文堂

51 花袋のテキストには、「こんなところにもライフがある」という主人公の言葉が散見されるが、しばしばそれは発見者の側の自己完結的な感慨に回収されてしまい、自他の間の対話に発展することはない。

52 『小さなものの諸形態——精神史覚え書』(一九九四年四月、筑摩書房)

53 『定本柳田國男集』別巻巻五(一九七一年五月、筑摩書房)所収の「年譜」による。なお、この会が実質的な龍土会の最後だったという。ちなみに、龍土会が懇親会化したため別に設けていたイブセン会も、これより前に開催されなくなっている。

54 柳田國男『故郷七十年』(一九六二年一月、のじぎく文庫)

55 たとえば、『妹の力』（一九四〇年八月、創元社）。なお、本書の中で柳田は、「家父長制」が近代的な産物にほかならないことを、いくつかの母系制を具体的に例示しながら訴えてもいる。

56 たとえば、『不幸なる芸術』（一九五三年六月、筑摩書房）。

57 注56と同じ。

58 「インキ壺」（一九一〇「明治四三」年七月、「文章世界」。のち『花袋文話』注1参照）

59 「柳田民俗学の文学性」『日本自然主義論』一九七〇年一月、八木書店